

## 谷口江里也による現代語訳『風姿花伝』 第28回

### 風姿花伝 その四

神儀ということについて

申樂の始り その二

一、むかし佛在所、すなわちお釈迦がおられた国で、須達長者すだつちやうじやが祇園精舎ぎおんしやうじやを建てて、その供養くやうを行った時、そこで釈迦如来しゃかにょらいが説法せっぽうをされたが、そのとき、提婆達多だいばだつたが一人の、仏の教えを信奉しんぶつしない異教の者たちを連れて来て、木の枝や、笹の葉はに幣しでをくくりつけ、踊り騒いだので、ご供養の言葉を宣のたまべることができなかつた。そこで仏陀は、お釈迦様の十人の弟子の一人である舍利弗しやりふつ達だつ多たに目を留め、仏の力をお授けになった。そこで舍利弗は、御ご後戸おんこうどに、鼓こや笙鼓しやうこを用意よういさせて、同じく十大弟子の一人である阿難陀あなんだが才覚さいかくを働かせ、舍利弗が知恵を、さらに十大弟子の一人ひとで弁舌べんぜつに長けた富樓那ふるなが言葉を用いて、六十六番の物まねをしたところ、異教の者たちは、笛や太鼓の音を聞こうと御後戸ごごに集まり、これを観て静かになつた。その間に、お釈迦様が供養を宣べられたのだった。申樂は、この天竺での出来事から始まるともいわれている。

文中の色文字は世阿弥が用いた用語をそのまま用いています